

巻頭エッセイ

秋に想う

NPO 法人希望監事

小林征司

春夏秋冬の四季を色に擬えて青春、朱夏、白秋、玄冬と呼ぶことがある。

何かさわやかで軽い感じのする青、焼け付くような激しさを感じさせる朱、弱弱しいが無限の広がりとも包み込まれるような深さを感じさせる白、冷たいが逞しさを感じ頼りがいのある黒。

そして今、白秋から玄冬へ季節は移ろいかけています。

私はこの季節が一番好きだ。はしゃぎすぎ、喋り過ぎた娘たちの夏の疲れを静かに癒してくれるのもこの時期だろう。

そしてちょっと反省する。夏の明るさに浮かれて大事なことをなおざりにしなかったか？

強い陽射しに浮かれて弱い人や大切な人を傷つけたりしなかったか？

炎暑の陽射しがおさまり涼しい風と、つるべ落としの夕刻の長く薄い陰りが混ざり合うこの時期こそ人が一番優しくなれる気がする。

秋の下に『心』を加えて『愁い』と読む。

愁いは人の心を病ませる。そして病むことで人の生は陰翳を帯びる。

だが、その陰翳の中でこそ自分の弱さに気づき、周囲の人の弱さを思いやる事が出来る。

高名な作家の著述「陰翳礼賛」を待つまでもなく日本人が伝統的に持つ薄灯かりへの郷愁。

昔はどこの家庭にもあった障子越しの月灯かり、裸電球の短い光、仏壇の蝋燭の灯かり。

今、これらから遠ざかり影を探すのに苦労するほど明るくなった。

だがこれら自然の明暗を征圧して造り上げられた明るさは疲れる。常に真昼で夕暮れも夜もないようなものだ。

「陰翳の不在は暴力である」そう言い切った評論家もいた。

ときにはフッと心を緩めたい。

柔らかな気持ちで見つめなおしてみたい。

薄明かりでなければ気づかなかった美しさの再発見のためにも。



私には「また会おうね」ときつと言う

本当にお別れの日が来たとしても

幸せ色に「さよなら」は似合わない

「さよなら」は言わないだろう

きつとこれから先も

「またね」とか「じゃあね」とか

「また、会おうね」と笑顔で言う

人と出会って別れるとき
私は「さよなら」とは言わない

「さよならは言わない」

とも作



「はちみつ」さん主催の「はちフェス」が、どんぐりの森を会場に開催されます。これは、初めてのイベントですが、地域の仲間としてどんぐり工房も参加出店することにしました。仲間を増やし、売り上げも伸ばそうと一同張り切っています。

「おたまじゃくし」のつぶやき 理事 伊佐勉

最近よく耳にする言葉で気に障るのは「命を守る行動をとってください」です。とりわけ7月2日、九州豪雨の際に気象庁が発表した「自らの命を自らで守らなければならない」というコメントには戦慄を覚えました。早い話が「自己責任」！

高齢者や障がいのある人等「避難行動要支援者」は、自力で対応することが難しいです。そんな時、同じようでもTBSラジオ『セッション 22』のパーソナリティの荻上チキさんが発した、「身の安全を図ってください」には優しさを感じました。

チキさんは精神に障がいがあり、通院しながら創作活動をしていて、言葉の使い方に神経を尖らせていますが、今のメディアが欠けているところです。今の時代、テレビや新聞は忖度が過ぎるし、ネットは匿名の野放し状態。私はラジオを中心に据えて「メディア・リテラシー」を磨いてゆく所存です。

編集子雑感

新執行部（理事会）が発足して3か月余り、毎回「どんぐり」と「だんらん」の既存事業を「吟味・評価」して貰うのが定例会でのワーキング。やがて、新機軸を打ち出し、「新たな」希望へと飛翔！と、乞うご期待・・・